

【なでしこ団子観戦記】

作・並木橋のK

「なでしこ」の快挙から数日が経ったある休日、僕は渋谷区の二子玉川グランドへ足を運んだ。「なでしこ」の感動をもう一度と夢想しておったら、「今季のSFA1種は、Jリーグよりも面白いらしい？」という噂を耳にしたからなのじゃ。こうして、7月某日は第1試合（9：30）に間に合うように家を出立した。

懐には、昨日買った団子を4本忍ばせる。
みたらし、きな粉、よもぎ、ごまの4種類を1本ずつ。
本日は4試合なので1試合につき1本食べるという計算じゃ。

「二子玉川」駅に到着したのは9時頃。
降り立った駅前の風景が一新していたのにはたまげた。
「さすがはオシャレな街、ニコタマじゃ〜」と感心しているのもつかの間、辺りを見回せば、洗練された服装の犬連れのマダムの姿があちらこちらに。
「これが噂のニコタマーゼかのう〜。シロガネーゼにも引けを取らないのお〜」と思ったが、農だって似たようなもんだ！団子を懐に忍ばせた「ダンゴリーナ」と言ったところじゃ。

「二子玉川」駅からグランドまでは、歩いて10分ちょっと。途中には兵庫島がある。
兵庫島は、いまは陸続きになってしまったが、昔は立派な島だったそうじゃ。
1358年には、新田何某がどうのこうのと、歴史的な出来事があったようだが、詳しくはウィキペディアを讀んどくれ。
多摩川の河川敷を上流へ歩き野球場を過ぎると、天然芝のサッカーグランドが見えてきた。
隣にある5面のテニスコートを目印にするとわかりやすい。

さっそくゴール裏にゴザと座布団を敷いて腰を下ろすと、ちょっとイケメンの青年が声をかけてきた。

「こちらでは見にくくありませんか？」
「もしよろしければ、テントのお近くへどうぞ」

イケメンに加えて、この親切心。なかなかおらんぞ、こんな好青年！
僕は「ぜひ娘の婿に？」と言いかけたが、運痴の長女は5年前に結婚したのを思い出した。

次女にいたっては、「なでしこって、なで肩の相撲取りが四股を踏むの？」などと言っているスポーツ音痴なのじゃ。

「では孫の婿に？」と言いかけたが、孫はまだ2歳。

儂とこのイケメンは、家族にはなれない運命のようじゃ。残念無念！

結局、このイケメン青年の言葉に甘えて、グラウンド中央付近にあるテントの近くにゴザと座布団を敷き腰を下ろした。

風が気持ちいい。草の香りが鼻先をくすぐる。やはり、天然芝は最高じゃ！

あまりの嬉しさと心地良さに、まだ試合がはじまっていないのに、とにかく団子が食べたくなる。

1試合に1本という計算のため、ここで食べてしまうと最後の試合では足りなくなってしまうが、そんなことはどうでもいい。食べたいのじゃ。

茶葉、急須、ポットからお湯を注いでお茶の準備を終え団子を取り出そうとすると、

「よかったら、お団子を食べませんか？」

とイケメンが声をかけてきた。

「お口にあうかわかりませんが、どうぞ」と。

なんとイケメンは、儂の一番好きなずんだの団子を出してきたのである。

「ずっ、ずんだの団子ではないか？」

実は団子を買う際、無念にもずんだの団子だけが売り切れていたのだ。

「よ、よろしいのか？」

「ええ、ボク、ずんだのお団子が一番好きで、たくさん持ってきましたから…」

このイケメン、わかっているではないか！

親切な青年のうえ、味覚も確かな、違いのわかるコーヒーのような男だ。

「かたじけない」

と礼を言い儂はずんだの団子を口へ運んだ。

美味い！美味すぎるぞ、このずんだ！

感謝のあまりイケメンに礼をしなければと思い、僕は鞆の中を探った。

だがめぼしいものがない。

あるのは、昼ごはんにしようと持ってきたうなぎ弁当だけだ。

毎年「土用の丑の日」には道玄坂の「花〇」でうなぎを食べるのが恒例だが、今年は体調をこわし食べ損ねてしまったため、今日の昼ごはんには何としてでもうなぎを食べようと思い、今朝スーパーでうなぎ弁当を買ってきたのだ。

美味しいずんだのお返しにスーパーのうなぎ弁当では失礼だが、礼をしないよりはましだ。

「ずんだの団子をありがとう。とても美味しかったでござる。お返しといっは何ですが、うなぎ弁当を食べてくだされ」と僕はうなぎ弁当を差し出した。

「ありがとうございます。ボク、うなぎ大好きなんです。ところでこのうなぎはヨウシヨクですか？」

「養殖？スーパーで買ったので、天然ものではないと思うが…」

「養殖でも洋食でもありません。和食ですよ」

うまい。うま過ぎる。

親切で味覚も確かで違いのわかるコーヒーイケメンの頭の回転は、うなぎを買ったスーパー以上にスーパーのようだ。

このように、イケメンとの楽しい会話を弾ませているうちに、少しずつだが選手たちが集まってきた。

そんな彼らはみな、初対面の僕に気軽に挨拶してくれる。

「おはようございます」

「暑くはないですか？」

「熱中症対策はしてきましたか？」

「日焼け止めを貸しましょうか？」

「そのお茶セット、本格的ですね」

「暑い時こそ、熱いお茶に限りますよね」

「ボールには気を付けてくださいね」

「今日は絶対に勝ちますから応援してくださいね」

などなど、見ず知らずの僕に、みなが温かい声をかけてくれる。本当のファミリーのようじゃ。

しかしそんな彼らも、試合が始まると、優しい表情から一変して真剣そのもの。

ひたむきにボールを追いかけて、チャレンジすることを恐れない。

必然とプレイは激しくなるが、フェアなプレイを心がける。

僕は1本目の団子を口に入れた。

仲間と相手を思いやり、相手を倒してしまった場合は、すぐに謝り手を差し伸べる。

僕の団子はどんどん進む。

最後まで諦めず、逆転、勝利の奇跡を待たず、奇跡を自分達の手で引き寄せようとするその姿は、

「なでしこ」そのものだった。

最後の団子を口に運びながら僕は思った。

「なでしこ」の精神は、ここにも生きていたのじゃ！

溢れ出てくる感動の涙を堪えきれず、人目を憚ることなく、僕は泣いた。

「ちょっと、お父さん！」

誰じゃ！？僕の感動を邪魔するのは…。

「こんなところで何してんの？」

スポーツ音痴の次女だった。

「おっ、お前こそ、ここで何をしておるんじゃ？」

「えへっ、実はこの人がいま私がお付き合いしている人なの…」

なんと次女の隣には、あのイケメン青年が立っていたのだ。

「この前ドイツ旅行に行った時、偶然「なでしこ」の決勝戦を見たの。その試合会場でこの人と出会ったの…」

おお～「なでしこ」よ、いろんな意味でありがとう。

どうやら僕は、イケメンとファミリーになれるようじゃ。

[この物語はフィクションです。]